

目覚めるといふこと

藤 本 愛 吉

ただ今、学長先生からご紹介に預かりました藤本愛吉と申します。私は三年前に脳出血をし、右半身が麻痺した状態になりました。その後一年間大谷専修学院にいました。その間、口と手と足のリハビリをやりましたが、まだよくしゃべれません。皆さん、聞きづらいかもしれませんが、ご容赦ください。

私は、今年で六十三歳になります。十一月一日が来たら、六十三歳です。これまで生きてきて、一番難しいのは何なのかと考えますと、「非指示的カウンセリング」を提唱したカール・ロジャースさんを紹介されている友田不二男さんが言われていることで、「話を聞く」ことが一番難しいのだとおもいます。話が本当に聞けたらですね、生きることにな力がついてくると思います。「話を聞く」ということはそれくらい

自分の人生に大きな影響を与えていると思っています。私は、人の話を聞くことがどんなに難しいかということが、六十三年生きてきてやっと少しわかったのです。お釈迦様の經典には、「かくのごとくわれきけり」また「われかくのごとくきけり」、「如是我聞」「我聞如是」の文句で始まっていますね。これは、いかに私たちは話が聞けないかということなのです。お経の中には本当のことが書かれていると書いてありますけれど、私たちはそのお経をなかなか読めないのです。何故かというところ、素直に聞こうとしないからです。だから皆さん、もし、こういう話の場を通して、また自分の人生の中で、人の話をジーンと聞ける人になったら、私はもう十分だと思うのです。

私は今愛知県みよし市になりましたけど、三好町というところで農家の七人兄弟の六番目に生まれました。昭和二十二年、一九四七年です。その時代は貧乏で、とても大変な時代でした。そうした中で私は三つの夢を持っていました。一つはプロ野球の選手になること、もう一つは学校の先生になりたいという思いです。そして、一つはお坊さんになりたいなと思っていました。プロ野球の選手になりたかったのは、野球

目覚めるとのこと

が好きだったのもありますけど、当時は日本中が貧乏でした。つらくはなかったですけど貧乏でした。私の家も二反五畝・二十五アールの田と少しの畑を借りて、それで家族九人、生きなきやならない。大変なことでした。そういう状態を身をもって感じていた私には少しでも裕福になって家を楽にさせたいという思いがあつたのです。それには、好きなことをやって儲けて暮らしを楽にしたいと、子ども心にプロ野球の選手になりたいという夢だったので。だから、当時の長島選手とか川上選手がやってきたことを自分なりにやりました。かかとを上げて毎日足の力をつけると言ったら、学校へ通うまですつとかかかとをあげて歩いていたりしました。お風呂場で手首を強くするために湯舟の中で手首を二百回ふりなさいと書いてあつたら、その通りにやってみたりしました。でも、実力のなさは目にみえてはつきりしてきました。だから野球選手への夢はわりと早く断念しました。次に願っていたのは学校の先生です。

私の小学校六年の時、まだ大学を出て間のない若い男の先生が担任でした。私は、「先生しゃべりたければ勝手にしゃべっていろ、私は聞かないよ」、という態度で授業中におしゃべりをしていたら、先生から、「石川、前に出てこい」ときつく言われま

した。「石川」は私の旧姓です。先生何を怒つとるのかなあと思ってた前に出たら、思いつきり頬つぺたを叩かれました。パチーンと。そしたら、一予期してなかった時にそういうことが起きるのですねー私、おしっこがシャーツと出ちゃったんです。さらに「バケツに水を入れて外へ立ってなさい」と。昔はそんなような罰がありました。私には、何故、怒られたのか意味が分かりませんでしたから、とにかく腹が立って先生を睨みつけながら廊下に立っていました。低学年の子が私の前を通りながら「お兄ちゃん、臭い」と言うのを聞くと余計に腹が立ってね。先生許さんぞ、と。みんなの前で恥をかけただけじゃなくて、おしっこも漏らしてしまっているし、低学年の子たちにもみんなに見られるし、悔しくてね。その時はまだ、私には怒られている理由が分かかっていませんから。本当は自分が悪いのにです。話を聞く場にながら話を聞かないのですからね。叱られて当然なのですけど、無自覚な人間の悲しさですね。自分のしていること、思っていることがどんなにひどいことかは分からない時は分からないのですね。だけど誰か一人、本当の友達がいてね「それ、本当に失礼だよ」と言ってくれると目が覚めるのでしょうけれども。

目覚めるということ

次の授業の体育の時間にみんなをおくり出した後、先生が教室で待っていて「入っ
てきなさい」と私を呼びました。教室へバケツを持って入りながら先生の顔を睨みつ
けました。許さん、という思いでした。そしたら先生が机の中から封筒に入った手紙
を出されて、「今日はこれを持ってうちに帰りなさい」「ふん、帰ってやるわい」と。
鞆かばんの中に教科書をバーンと入れて、「こんなところにおるかー！」という気持ちで教
室を出ました。帰り道、先生が渡された封筒を破って中身を見ました。そしたら、
切々と私のことを「君は自分を大事にしているかい」「五年生のときから一緒にいる
けど、君は自分を大切にしているとは思えない」「もつと自分の可能性を考えて、ち
ゃんと真つ直ぐまっすぐ向いて生きなさい」と。初めて自分より自分を大事にしてくれる人の
言葉を聞いたのです。この言葉は、小学校六年生のこの僕にもわかりました。さつき
は悔し涙でしたけど、今度は嬉し涙が出てきました。「ああ、先生は僕のことをすご
く大事にしてくれている」、こういう感動がありましたね。それが、私が大きくなっ
たら学校の先生になりたいという将来の希望に火がついた出来事だったんです。心に
深く「ああ、僕も学校の先生になってー今の私の言葉で言えばー子どもの心を開いて

あげたい。魂を育ててあげたい」と、初めて自分の中に「志」というものが生まれてきたのです。ちよつと人生に真向きになれた出来事です。

もう一つのお坊さんというのは、同級生に浄土宗のお寺の子がいました。その同級生のお母さんはいつも畑で、野菜やら花などいろいろ作っていました。遊びに行きますと、僕を心から迎えてくれるのです。今思うと、それは観音さんのような方だったんです。観音菩薩と言いまして、まず無条件で手を迎えてくれるような人でした。そういう友達のお母さんの顔を見るとホツとしました。行くと「愛ちゃん、よう来たね」と声を掛けてくれる。だから行くのが楽しみでした。そのお寺では私の見たことのないようなケーキが出されたりして、そっちの方も目当てでした。しかし、本当の目当ては、夏の暑い中で手ぬぐいをパツと取った時のその友だちのお母さん。キラキラ輝いて畑で働いているそのお母さんの「よう来たね」の言葉。自分の親と違うんです。友だちのお母さんがそうやって迎えてくれた時、その場所が明るく感じられました。また花祭りなどの行事のとき、お御堂の中に入った家にはない静けさがあった。それがまた、何とも言えない安堵感がありました。「ああ、こういう所におれたらいい

目覚めるとのこと

いな」と、素朴に思いました。それが小学校の時、お寺のお坊さんになれたらいいな
 と思った理由です。

中学校では野球をやりながら、三年間を過ごしました。私の家は貧乏でしたので、
 高校へ行くにあたって親父と一悶着ありました。父は明治三十三年生まれで六十三歳
 で亡くなりましたけど、私が十五歳の時の十二月頃です。父が私を呼びまして「これ
 で中学校は終わりだな」「うん」「もう親の義務は果たした。これからは自分で生きな
 さい」お父さんは「親の義務は果たした。もうこれからは一人で生きていく年齢だ」
 と。当然ですね、義務教育というのはそういう意味として理解してました。私の一番
 の長兄は高校に進学したかったけど行けなくて、建設会社に、僕たち家族、兄弟を支
 えるために中学を卒業するとすぐに働きに出ました。私はそれを見ています。兄は力
 強く生きていました。真ん中の兄貴は、自分でアルバイトをし、フーフー言いながら
 ですが高校を出ました。私も高校へ行きたいと思いました。学校の先生になりたいと
 いう夢がありましたから。そしたら、建設現場で父母と一緒に仕事をしていた兄貴
 が、「オレが学費を出してやる」「オレも高校に行きたかったけど行けなかったから、

お前が行きたいならオレが出してやる」と。それで私はアルバイトもしたのですが、一番上の兄貴、後に郵便局に勤めるようになるのですが、その兄貴から学費を足してもらって、高校へ行きました。

昔の頑固親父のスタイルはそうなんです。一言です。義務教育を果たした。親の務めは果たした。後は自分で生きろと。そういう考え方に私には何の違和感もなかった。そうだ、兄貴たちもそれで生きている。僕もそうだ。「だけど、高校へは行きたい。学校の先生になりたい。だから高校へ行かせてくれないか」と頭を下げたら、父は「もう親としての義務は果たした」と。そしたら兄貴が、「オレも高校へ行きたかったが行くことができなかった。せめてお前の学費の援助をしてやるよ」と。そう。途中で高校に行つたのです。しかも普通科、公立でなければ行けなかったのです。そして、三年がたちました。三年になると大学進学が問題になり、私は進学を希望し、しかも理数系を選びました。数学が好きでしたから。合格すると先生が言って下さったもので、受かると思って臨んだのですが、落ちました。落ちた時は働くんだと決めていました。友達には塾に行つたりした人もいましたが、私は働きました。ガン

目覚めるとのこと

リンスタンドと、プロパンと、タクシーを経営している会社に事務で勤めました。事務である以上簿記ができなくてはいけません。普通科高校では簿記は学びませんでしたから、簿記の塾に通って三級の免許をとり、事務の仕事が出来るように自分なりに努力しました。一生懸命で面白かった。給料を上げるために会社と交渉したこともありました。せっかくやる以上、そこにおるのだから、自分の可能性をそこで伸ばしたい。その仕事の中で可能性を伸ばしたい。皆さんもきっとそう思うのではないですか。そこにいるのに力が出ないというのは、どこか本当にそうさせないものがある、本当はどんな人間でもその場にいたら、その場で出来ることを精一杯やりたいという心があると思うのです。私はそこでいろんなことをやらせてもらいました。

そんな中である時、本屋さんに立ち寄って雑誌を見ていたら、通信教育で学校の先生の資格を取れるってというのが載っていました。東京のT大学の案内にです。「えっ、働きながら学んで大学を卒業できるのか。先生の資格が取れるのか」、先生への夢を繋ぐことが出来たのです。嬉しかったですね。しかも入学試験がなかったのですよ。願書を出して合格。よかったです。それで私はT大学へ、クリスチャンの学校で

したが入学しました。後に女優になられた人も本科生としておりました。私は通信教育生ですので、昭和四十四年から四十八年の間、四年間行きました。夏だけです。

本科生の方が休みに入った夏だけ実際に授業を受けるのです。スクーリングという授業です。普段は働きながらですからレポートを一二四単位分書いて、卒業論文が八単位分ありました。この夏季スクーリングに来てビックリしました。数千人以上の人がその通信教育受講者でスクーリングに来ていました。現役の校長先生、教頭先生、それから若い先生、社会人で会社に行っている方々、いろんな年代の人が勉強したくてうずうずしている感じでした。私はそんな世界を初めて見ました。自分の今まで愛知県の三好町で見えていた世界とは違う、初めて外を見た思いました。「ああ、こんなにも勉強をしている人がいるのだ」と思って、初めて勉強することへの意欲に火がついたのです。二十四歳の時でした。

それまで私は伊藤左千夫の『野菊の墓』一冊しか読んだ記憶はなかったのです。それほど本を読まなかった。ところが人間は本当に深い縁を受けると、思わぬ形で勉強への、読書への意欲に目覚めることがあるのですね。「ああ、読書っていいなあ」

目覚めるとのこと

と。自分の人生をこの生身の体と、書いている人の人生と深く結びながら人生を学べる。また社会人として生きている人たちが今日の前にいて人生を深く広く学ぼうとされている。四十、五十、六十歳の方々が勉強をしに来られている。学校の先生の資格を取るためだけじゃないのです。社会人になったら勉強が足りなかったと。六十歳になっても再勉強されようとして学んでおられる。何ていう世界だと。初めて外の横の広がりを目が覚めました。それで私は二年間で六十四単位分のレポートを書かないといけないのに、それまで二通くらいしか書けなかった。働いて書くというのは大変でした。そうしたら、僕の友達になってくれた和歌山県の一人の女性が「愛吉さん、私のレポート貸すから、それを参考にして書いたら」と言ってくれました。何から何まで助けてもらって書くことができて間に合いました。四年間で卒業して、豊田市の小学校の産休の先生の代用教員として勤めました。九年か十年間勤めたと思います。このT大学でもう一つのかげがえのない出会いがありました。一人のお念仏をする人に出会ったのです。私は高校の社会の先生になりました。若い高校生と、恋愛、友情、そういう話を深めていきたい。だから社会、倫理・社会の免許を取ろうとして

いました。スクーリングで『インド哲学史』っていう授業がありました。私は大学では『道元研究会』という坐禅を組む研究会に入っていました。その『道元研究会』の先生が、『インド哲学史』を教えている先生について「この学校には本当に深い眼まなこの人がいるよ、その先生を僕も尊敬しているんだよ、愛吉くん」。私は『道元研究会』の先生が好きでした。その先生が尊敬している先生がある。へえー、先生が尊敬するって？ 僕はちよつとやんちゃでしたから、そんなことあり得んと。人間が人間を尊敬するってそう簡単に来るものじゃないと思っていました。しかし、尊敬するとうことは、能力じゃなく、内感力のような感じです。「尊敬している」と、そうおっしゃった『道元研究会』の顧問の先生はT大学でも教育学部長という、大変重要な役についておられた立派な方でした。その先生が「みんなにその先生の教えを聞いてほしい」と……、

思い返せば、その先生は本当に尊敬を受けるような、素晴らしい人でした。しかし、私は実際に姿を見、授業を受けるまではたいしたことはないだろうと思っていました。そして、そんな思いでその先生の授業を待ち受けました。受けたのは三時間く

目覚めるということ

らいます。私は、その初めての授業をものすごく覚えています。今でも……。人間の出会いというのは分からないのですね。どうせ先生といっても人間なのだからそんなに変わるものではないと、尊大ぶって、野心いっぱい。力みといましようか、そう思っていました。「どうせ人間は皆同じなんだ、たいしたことない」とおごりたかぶっていました。

その先生が廊下を歩いて来られました。歩いて来られた姿を見たその瞬間にね、私の心に変化が起こったんです。歩いてくる姿、本当にしずしずと、体はそんなに大きくないです。しかし、その方は大きく見えた。しゃべらないのに、歩く姿を見ただけで感動しました。それまで何千人、何万人と、私も二十四年間人生を生きてきた間に、いろんな人に出会いました。けれど、見たこともない、出会ったこともない雰囲気を持っておられました、しゃべる前から。それで恐くなって、教室の隅の方でそっと先生を窺っていました。そうしたら、六〇人くらい入る教室で先生が、クリスチャンの学校なのに数珠を出して合掌し、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と称えられたのです。

当時私は、宗教は元々ちよつとまやかしものという疑心がありました。何かにするというのは許せない。何で、すがらないといけないんだ。貧乏なら貧乏で生きればいいじゃないか。病気の時は病気になったのだから、薬や養生によって治せばいいではないか。何で何かにすがらなければあかんのかと、自分の描いたイメージの宗教的なことに拒否反応がありました。

私の家は浄土真宗の門徒です。この体験は二十四か五歳でしたので、三十六、七年前のことですが忘れられないのです。初めて自分に不安と怖れを抱いたのです。自分がないものを先生は持っていらつしゃる。しかも、確かな眼差しを。「なんなのだ、この人は」。私と生きている精神空間が違うと言いますか、表現できないほどの気持ちになりました。自分が自分と離れた感じと言いますか、それまでの自分にとどまらない思いが湧いてきました。私は初めて授業を集中して聞けました。そしてノートを取ったのです。他のスクーリングの授業ではほとんどノートを取っていません。その先生の授業の一挙手一投足、一言々々が、初めて聞く、のびきらない人生の、私の、人間についての大事なことを言われている気がしたのです。やんちゃな、よそ事

目覚めるとのこと

ばっかりしかしない僕が、耳をすましたのです。今も覚えていますが、先生が「人には二度誕生するということがあります」とゆつくり言いましたね。インドの詩人タゴールが、インドの言葉で鳥の命を「ドウビ ジャー」といって、その鳥の生になぞらえて人も二度生まれるものだと言っていますと。タゴールも目覚めた人だと。そして私たちも目覚めていくという、大きな一つのいのちの願いを持っているのですとおっしゃいました。

鳥は初め卵で生まれてきます。しかし親鳥がお腹の中で何十日か温めて、卵がヒナになる。ヒナが「もうこの殻いらぬよ」。そういう状態になったら、ヒナはくちばしで中からつつく。その音を聞いて親鳥は「うん、もうこの殻はいらぬんだね」と言って今度は親鳥が助けて外から殻をつつく。そして雛は明るい大気の世界、外に出る。それが鳥の命の誕生です。「人間もそうなのですよ」と言われました。私はこんなこと聞いたことありませんから、もうビックリするやら、驚くやら、頭の思考の中で激しい揺れがありました。じゃあ僕は二十四歳の今まで生きてきたのは一体どこにいたのか。殻の中か。殻とは感じないけどどう理解したらいいか。あの先生の言葉

の確かさ、響き。「人間は二度生まれまますよ」「二度生まれる大きな命を持っているのですよ」「親鳥に抱かれるということがあるのですよ」と。

その後、世阿弥の『花伝書』などのいろんな目覚めの言葉、目覚めの契機になるような言葉を先生が紹介されましたが、私はそれら全部をノートにとりました。でも一番心に残っているのは、先生がタゴールで話されたことが、親鸞聖人が求めていかれたものと一つになるということでした。それが、わずか二、三時間の授業でしたけど、深く心に残りましたね。私も目覚めていきたい、それが人間のいのちの実りであるなら、そのような方向に生きていきたいと思ったのです。その先生の講義と、その先生に会わなかったら、今の私はないんです。相変わらず、南無阿弥陀仏とかそういう教えを外から眺めて、いろいろ思案考察しながら自分の頭の中で解釈していくだけで終わってしまったかもしれない。しかし、私にはその先生の存在に、言葉に感動があった。そして私もいつかあの先生のように、いのちがいのちに目覚めていくように私も目覚めていきたい。目覚めて人生を生きるものとなりたくと、分からないながらもそういう思いを持ったのです。

目覚めるということ

沖縄のある小さな小島に住んでいらつしやる女性の方が、小さな記事の中に「本当のことに目覚めていけない人生は惨めだと思えます」と書かれていました。それも私の心に残りました。受講者の中には、ものすごい聞き取り方をされる方がおられる、同じ授業を何でこんなに深く聞けるのかなと思つたら、その人はそういうことを感じる人生を生きてこられた。人間関係やそういうところで苦労されて、悩んでおられただけにより深く言葉が響かれたのではないかと、今は思いますけど。同じ教室におつてもその言葉を受け取る受け取り方が、全然違つて聞こえるのです。私はその時、自分の人生のいのちに一つの楔くさびを埋め込まれたのです。

私はその先生の授業が終わつたあと、念願の学校の先生になれるという機会がありましたので、学校の先生の道を選びました。小学校の産休、赤ちゃんを産む先生の代わりにあちこち行く、十年近くで十六校を廻りました。一年生、二年生、三年生が多かったです。私は思う存分やりました。自分のなりたいたいものになれた。例え産休の先生で三カ月毎に学校が変わつても、とにかく楽しかった。子どもとの一体感、信頼感、お母さんや同僚の先生との深い信頼感があつて。夢のようでした。好きな仕事が

できて、好きな世界におつて、お互いに信頼関係があつて。子どもも信頼してくれ
る、お父さん、お母さんも、そして同僚も、校長先生まで一緒になつて。学校を変わ
るたびに新しい人と出会つて、そうして大事にして頂きました。言うことない十年間
が過ぎました。

三十六歳の時でした。当時教育の現状を心配なさっていた林竹二先生が「学校は子
どもたちの生きられない場所になつてしまった」という連載を『朝日ジャーナル』と
いう週刊誌に掲載されました。その記事を読んで、当事者といふべき学校の先生をし
ていた私は胸が非常に痛かったです。ほとんど林先生の言葉は当たっていると思つた
からです。自分の教育の壁を感じました。

もう一つ私は学区を移るたびに、校長先生、保護者の方に紹介してもらつて学区の
アパートに住んでいました。当時、七十歳前後が平均寿命でしたが、私は三十六歳に
なつて独身でした。一人で住んでいますから、ふとベランダに立つて夏の夜空を見た
時に、「ああ、もう三十六歳になつたなあ」と思つたんです。本当に自分のやりたい
ことをやらせてもらつてきて、悔いはないのです、世間的には。だけど三十六歳は平

目覚めるということ

均寿命で言うところとちよつど峠ですね。その時、ふつと浮かんだのは、蓮如上人の御文によく出てくる「無常」という言葉でした。

私の出会った先生の中のある方はそういう言葉ではなく「人生は二度ないですよ」「二度とない人生を悔いのないように生きなさいよ」と教えてくれました。「ああ、人生は二度なしだなあ」と思ったら、なくなっていた身近な人や生きもののことがフーツと浮かんだのです。人生を振り返る時だったのでしょかね。本当に悔いのない人生をそれなりにやってきたつもりですけど、一つ「無常観」というものが入りますと、やっぱり「本当に」それで悔いがないかと、「本当に」というのがついてくるんです。あらためて、悔いがないかということ考えたとき、ふと身近なものの「死」が思い出されてきたのです。

小さい時、私は猫を飼っていました。「たま」っていう猫でした。私が小学校四年生くらいの時でした。学校から帰ってきたら「たま」がいない。母ちゃんに「どうした」って聞いたたら、「銀行のおじさんのカブにひかれて死んじゃったから、今、おじさんがお墓に埋めに行かれたよ」って。泣いて、泣いて、泣いてね。それでお墓に走

ったら、銀行のおじさん二人がスコップで桜の木の下に猫を埋めていました。わんわん泣いて帰ってきました。それが、私の身近な「無常」体験です、悲しみの。

その次思い出したのが、小さい「ペロ」っていう雑種犬のことでした。これは私のランニングのパートナーでした。私にすごく懐なついていました。ちょうどその頃、兄が結婚しまして子どもができたのです。その子どもが出来たときに、ちょうど犬のペロが毛の抜ける病気にかかってしまいました。当時は身近に犬猫病院があるわけではな
いですから、私は困ったなあとおもいました。狂犬病の予防注射しかしてありません
でしたから困ってしまいました。そんな時、兄貴が「おい、愛吉。子どもができてな
あ」「うん、知ってるよ」「嫁さんもちょっと心配してるのや」「ん？何を」「お前の大
事に飼っているペロだけだな」「うん」「病気にかかっているだろう。うちの子どもも
小さいし、嫁さんも心配しとるから、ちょっとどうか、と思つて」と言われまし
た。つまり、犬を処分してくれんかと言っているのです。当時それしかなかつたので
すね。僕は「いいよ」と答えていました。保健所に電話をしました。その夜です。急
に小さなペロがクーン、クーンと鳴くんです。ずっとなき続けていました。朝になる

目覚めるとのこと

と保健所の方が軽トラックにオリを乗せて来ました。丸い、キューツとしまる針金を持ってきてペロの首にかけたらシューツと締まって声が出ない、口も開かない状態で、そのオリの中に入れました。オリの中で解き放たれたペロは、クーン、クーンと鳴きながら、また夕べと同じ目で僕にすがっているようでした。保健所の方が「どうしますか。これで最後ですよ」と。「こういう時だいたい、止めてくださいって断る人が多いんですけど、君どうしますか」って言われているような気持ちになりました。後方には兄貴たちがいました。辛^{つら}かったけれど、私は「いいです」と答えました。そういうことを思い出しました。何で思い出したか私も分かりません。きつと、三十六歳、人生の峠へ来たなあと、人生には限りがあるだなあとということがちよつと心に入ったんですね。

もう一つ思い出しました。父は、私が十八の時になくなりましたが、下の姉が結婚するときに父親とケンカしましてね。父親も頑固でしたので、「言うこと聞けんのなら勘当だ。出ていけ」と怒ったのです。そうしたら、姉は出て行っちゃったのです。「やっぱり結婚したいから、ごめんね。お父さんに喜ばれるような家庭を作るから。」

「ごめんね」と言って出ていったのです。その姉が結婚して一年くらい経った頃、自分の家には電話がないものですから、近くのタマリ屋さん宅の電話に名古屋にいる結婚した姉の所からかかってきて、親父が出たのです。電話が終わり、帰ってきた親父が大急ぎで手早く荷物まとめてお袋に「名古屋へ行くぞ」と言って一緒に出て行きました。親父が帰ってきたのは夜になってからでした。その時、私はトイレに入っていました。そうしたら、頑固で、明治人気質と言われるような気骨を持った父が「うおーっ」と、号泣しました。私はトイレから出るに出不れず、何があったのかと思いました。そういう父の姿を今までに見たことありませんでしたから。そして、夜遅くに帰ってきたお袋に「母ちゃん、何があったんや。父ちゃん、泣いとったで」と尋ねました。母ちゃんも泣き顔で「姉ちゃんが死んだのや」と。「何でや」、母ちゃん言うには、「姉ちゃんが、赤ちゃんを産むために病院に行ったのやけど、赤ちゃんがなかなか出て来なくて、姉ちゃんも赤ちゃんも危篤状態になったんや」と。「それで、お医者さんが「保護者の方を呼んでくれ」と言われて、私と父ちゃんで行ったんや。もしたらね、「二人とも危篤でどちらかしか助からない」と、お父さんに言われたん

目覚めるとのこと

や。」

保護者としていった父が、どうするかと思つたら、「お前どうする」って、危篤状態の姉に聞いたそうです。こういう問いは、人間の決断のぎりぎりの重さ、深さだと思えますね。私たちはなにげなく決断をしていますけれども、決断というのは人間のギリギリのことと言つてもいいのかもしれませんが。ある国では「決断のところに人間の尊厳がある」と言われるそうですが、決断の重み、深さをその時に感じました。姉ちゃんは「自分は死んでいくからこの子を助けて」と言つたそうです。そうしたら父は「そうしてください」と医者と言つたそうです。今、その子はずいぶん大人になっていますけど、私はその時、姉ちゃんが子どもを助けて死んでいったということがあって、父の生涯でただ一度ともいふべき深いうめを聞いたんです。私は、その時に感じなかったけど、こうして年令をとつてみると、父親とか親というのは、いろんなことがあつて勘当だとか何だとかついで言葉に出してしまいますが、心の深い所では見捨てられないのだなあと思えました。ただ、姉ちゃんが、そのことをわかつていて父ちゃんとそういうギリギリの別れ方をしたのかということには私にはちょっとわからない

ですけれども。その父の泣き声を便所の中で聞いたことを通して、表向きの心と、もう一つ深いところの心があるんだなあということを知りました。

私はそういうことを思い出しながら、ふと学校での歌がよみがえってきました。小学一年生の担任をすると、迎えてくれる子どもたちが、「先生、一緒に勉強しようね」「お祝いしてあげるね」って歌ってくれた『しゃぼん玉』という歌です。皆さんも知っていますね。あれはある新聞社の本によると、野口雨情という方が、産まれた子どもが、早くになくなった。その悲しみを『しゃぼん玉』で歌ったのだと。そういうことを知っていました。けれど、子どもたちは今までいろいろなところで『しゃぼん玉』を楽しく歌ってきました。その時も、腕を後ろに組んで肩を揺らしながら歌い私を迎えてくれました。私はある時、一年生の子にでしたけど、「この歌はね…」と『しゃぼん玉』の歌の謂われを話しました。そしたら、小さい子は何もわからないかと思ったらそうじゃないんですね。かえって小さい子の方が「いのち」について共感する心が深いのだと思ったですね。オルガンで弾きながら、ゆっくり歌いました。子どもたちが歌ってくれたはじめの歌と雰囲気もテンポも違う中で、

目覚めるということ

しゃぼん玉 飛んだ 屋根まで 飛んだ

屋根まで 飛んで こわれて消えた

一語、一語、かみしめながら歌う中で、子どもたちの中におじいちゃんが無くなり、おばあちゃんが無くなり、かわいがつてる生き物が亡くなったり、自分の妹や弟が無くなり、胸の中にあるそうということが思い出されてくるようでした。

しゃぼん玉 消えた 飛ばずに 消えた

生まれて すぐに こわれて消えた

風 風吹くな しゃぼん玉 飛ばそ

実にゆつたりと歌ってくれましてね。私はそういうふう子どもたちが感情移入して言葉をうけとって歌ってくれたのを何回も聞きました。

あらためて三十六歳の時に、自分の人生について、「人生は二度ないのだよ」「あな

たは本当に悔いのない人生を生きていますか」と問うた時に、なりたいたいものになれた、夢を果たした。十分だと思った。でもね、もう一つ果たしてないものがあつたのです。それが東京で出会った念仏者の方との出会いです。自分はまだ精神的に本当の意味で目覚めた人間になっていない。人間としてまだ本当の意味で途中なのだと。子どもの教育の場に立ちますと、お粗末な自分の心がどんどん見えてくるのです。教育愛もありますけど、それだけではない、非常に悲しいエゴイストな心が見えてくるのです。どろどろしたものが。それでもって人間やいのちについて、本当のことは分かっていない。私には、あの念仏者の確かさ、いのちの確かさが無い。念仏も分からない。三十六歳だ。独身だ。私はそこで考えましてね。やっぱりあの念仏者の教えを聞きたい。

そのころ、私は『いのちは誰のものか』という本を読んだのです。その本は、私が三十六歳から二十五年間お世話になった京都の大谷専修学院の院長の信国淳という人が書かれた本だったので。たまたま手にしたのです。それを読んだ時、同じ感動を得たのです。「ああ、この人は本物だ」「この人のもとで勉強したい」と思ったので

目覚めるとのこと

す。ところが大谷専修学院はお坊さんの学校なんです。私はお坊さんになる気はなかった。ただ、いのちの目覚め、いのちの理(ことわり)を聞いたかった。自分の人生が学校の先生でどんなに楽しくても、それ以上に、自分のいのちに本当に目覚めて生き、死んでいきたいなあと思ったのです。

大谷専修学院は全寮制の学校です。当時授業料など計算したら、〇〇〇万円ちよつとで一年おれると分かったものですから、〇〇〇万円貯めて兄貴に言いました。「学校の先生をやらせてもらって、本当にありがたいことなんだけど、もう一回勉強しなくなった。そこはお坊さんの学校だけど、その院長先生の書かれた本に、惚れてしまった。そこでは生活すべてで仏教を学べるから、そこへ行きたいのや」と言ったら、お袋はあ然としましたし、兄貴はものすごく怒りましたね。「何を考えているのや。三十六だぞ。どういうつもりだ」と、こてんぱんに叱られました。でも、どうしても行きたい。自分の人生、念仏の人に会って、どうしてもその人の立っているところ(目覚めの世界)に自分もいきたいんだと。「行かせてくれ。金も貯めたし」「じゃあ、行け」と。「その代わり、お前の帰ってくるころはないと思え」と言われま

した。兄貴には嫁さんがいて、子供もいて、大きくなっていますから、これ以上は自分の居場所がないなと思っていました。だから「わかった」と、「でも行かせてくれ」と言って、教師をやめました。そして、大谷専修学院の門を叩いたのです。

入学試験の面接の時に、「信国先生はもう三年も前になくなっているよ」と言われて、よく見たら本に書いてありました。昭和五十五年になくなっていると。それを私は見ていなかったのです。だから、もしそれを見ていたら行かなかった。生きておられると思っただけです。その先生に会いたかったです。そして直じかに教えてもらいたかったです。自分で学んでもどうしても分からん。どうしても隙すきま間まが出来る。だから行こうと思っただけなら、なくなっておられて三年も経っていたのです。けど、面接の先生に「私もそうだけれど、ここには真剣に親鸞聖人のお念仏の教えを学んでいる人がいっぱいいるから、一緒に勉強していこう。よく来たね」と言われて、一年のつもりで入寮し、勉強を始めました。それから、二十五年いました。一年目が終わる時に卒業レポートを書いて面接を受けるのです。その時、先生が「学んだか

目覚めるとのこと

い？」と。「いえ、まだちょっと」「じゃ、残りなさい」と言われました。そして、二年目の時にまた先生に「どうですか、もう学ばれましたか?」「いいえ」と言ったら「じゃあ、残りなさい」ということもあって私は職員として学院に残ったのですが、実は、落第生として残っていたのです。そうして二十五年間落第しっぱなしでした。

お念仏の心は一体何なのだと。求めてやってきた一年目の四月、十三日に入学式があつて、十六日の授業で、私が、後に師事していった先生が、川の水が流れるような声で一言言われました。「みなさん、南無阿弥陀仏って簡単なことですよ」。私は兄貴とケンカして頭まで下げて学ぼうとやって来たのに、「簡単ですよ」と言われて、「えっ、この先生何を言っているんだ」と思いました。そうしたら「友だちがいるっていうことですよ」「はっ?」チョットチョットーそんな簡単なことを僕は聞きにきたんじゃないんだと心で叫んでいました。そしたらその先生「友だちがいる方、手を挙げてください」って言うんです。そしたらね、十八歳から七十歳余りの人までいろいろな方が五十数人いましたけど、誰も手を挙げません。手を挙げたのは私一人でした。ビックリしました。「えっ、みんな友だちいないの?」そしたら、その先生が「あ

あ、愛吉くん。いますか。「はい。」「では卒業です。どうぞお帰りください。」。一回授業を受けただけでは帰れません。その先生が、どういうことを言っているのか意味がわかりません。「何それ」と。すごく悩みました。しかし、後でよくよく考えてみたら、友だちが本当にしていることは、大変なことだということが分かったのです。私には、夜でも私のために車で引越しの荷物を運んでくれた、素敵な友だちがいたものですから手を挙げました。しかし「本当の」と言われたので考えました。「心からの友だち」っているのかを。

その先生は、威厳のある話し方ではありません。普通に話されるんですけども、私はその先生の言葉にひかれて、注意深くお話を聞きました。先生がどこかのお寺でお話される時などは、そのお寺の奥さんに、廊下の端の方で結構ですから聞かせてくださいってお願いして、追っかけみたいにして話を聞いていきました。先生はどういうところに立って、そういう言葉をおっしゃっているのかということを考えていきました。

私たちの学校は全寮制です。年齢に関係なく、「さあ、みんな一緒に生きましょ

目覚めるということ

う。」と、そういう学校です。朝から晩まで一緒です。そうすると、嫌でもお互いにいろんなところが見えてきます。初めて知った人が、一カ月、二カ月、三ヶ月、六ヶ月とみていくと、「えっ、そうだったの」って、どんどん自分の思い込んでいたその人の像が、覆くがえされるのです。どんどん変わっていきます。今でも思い出すことは、二年目の時に、二十歳前後の人と一緒にになりました。私の目からはちょっとやんちゃな人でしてね、なかなか寮生活と勉強がしきれない人だなあと思っていました。その人は、いろんなことをするものですから、私は嫌になってしまって、「勉強をしにきたのだから勉強しろよ。」「嫌なら止めたらいいじゃないか」と抗議しました。しかし、彼は止めずにそこにいるのです。そうして、私の目から見るとやっぱり今までどおり勉強をしない生活をするのです。私は、とてもその人と一緒に生活できなくて、辛くて、困っていました。その時に、その先生が授業で、「お念仏の世界には敵がいらないですよ。」と、一言おっしゃったのです。

「えっ、」私は、今僕の目の前にいる二十歳前後のその人を、「鬱うつつとしい、この人というののもう嫌だ。こんな奴いなきやいい、そしたら僕は勉強できるのに」と悩ん

でいたから、授業が終わってから僕は「先生。ちょっと待ってください。先程、授業で浄土真宗は敵がいとおっしゃいましたね」と言いました。そしたら先生は「はい、そうですよ」って、またスーと行っちゃうんです。何という凄いを言われるんだと。それで私は、じゃ、目の前にいる大嫌いな奴、こいつさえいなければと思う自分の心は何なのだと。初めて自分の心の方向へ向きが変わったのです。つまり、愛の問題なのです。私は本当に人を愛することができているのか。一緒にいる友だちに對して自分の心がどういうように動いているのか、まざまざと知らされました。先生が言われた「敵なんかいないですよ」とか、「南無阿弥陀仏は友だちがいるということですよ」という言葉など、私の心に引つかかっている先生の言葉が、ほんほんぽん、自分の中で甦ってくるのです。自分には相手のことを大切に思う心がないのか。どんどん自分の心を射るように向きを変えさせられてね。初めて強く自分の心と向き合うということになりました。そうして知らされた自分の心は大変問題のある心だったんです。

またある学生さんは人と話すのが苦手で、またそのため生活の面でも班の友だちや

目覚めるとのこと

班担の私ともお互いに心が通じ合わない日々が続きました。特に、言葉を呼びかけても届かないと思っていた班の友だちとの間がだんだんギスギスしたまま卒業間近の最後のミーティングになりました。

お互いの一年間の学習、生活、交わりがどうだったのかを述べ合いました。

彼以外の班員は、(私もそうでしたが)生活が彼のせいで大変だったというような意見でした。生活を通して一応お互いのことは見えるけれども、それは自分の思いのところで見えた彼でした。そう見られていたその彼が何と言ったかというところ、「今まで一緒に生きてくれてありがとう。」と、そう言いました。八人くらいの班員でしたけど、みんな、あ然としました。私も班担をやっていましたけれど、この人には、やはり自分の都合、利害を中心とした狭い心で接し、誰も尊い大事な人として愛せなかつたのです。これが私たちの日ごろの心とは思ってもみなかつたのです。でも彼は、班の友だちにきついことを言われながらも応えられず、一年間過ごしたのです。そうして、卒業する前に「一緒に生きてくれてありがとう」とそういう言葉を語ったのです。そしたらみんなね、心から彼と一緒に生きる気持ちがないままきたものですか

ら、胸が詰まって、シーンとなつてしまいました。泣く人もいました。私も彼からそんな言葉が出ると思いませんでした。つまり、私たちには彼の心が分からなかったのです。分からない心だったのです。こちら側から「私」という心で、彼の心を適当に思いはかっていただけなのでした。親鸞聖人が「真実之教」とされた『大無量寿経』は「諸の衆生において視すこと自己のごとし」とありますが、その言葉とは遠い遠い心での関係だったのです。でも彼はきつと、いろんな事情があつてのそういう生活スタイルだったのですね。このように、いろんな人とここまでやってこられたのは、大谷専修学院がある意味で、入学式の院長（竹中智秀）先生の挨拶にあつた「一緒に生きていこう」という学校だったからです。

「浄土真宗の教えというのは、こうやって、一緒に生きているのだから一緒に生きていこう、それだけですよ。」とも言われていました。私が出会った「南無阿弥陀仏」というのは友だちがいるということですよ」と、「浄土真宗といっても特別なことではありません。こうやって共に生きているのだから共に生きていきなさい。これだけ

目覚めるとのこと

です。」と、院長先生の入学式の挨拶の言葉と一つのものでした。

私には、まだお念仏のことはよく分かりませんが、生活のところと言うと、その人はいろんなことがあって、ものはなかなか語れなかったけど、そこに居るといふ存在の深さみたいなものがあつたのではないのでしょうか。私たちの日ごろの心では受け入れられませんけど、一緒におつたということが、その人の中で「一緒に生きてくれてありがとう。」と、そういう言葉になつたのではないかと思えます。

その彼が卒業して十年以上経って、竹中先生が、急にご病気でなくなられ、学校のある別院でお葬式がありました。七十四歳でしたでしょうか、二十歳ちよつとで学院に来られて五十年以上学院で共同生活をされた先生です。いろんな人が葬儀に来られました。その中にその彼が遠くから来ていました。私は受付をしまして、「先生、来ました」と。「あ、〇〇くん、来たか」。遠くからわざわざ来ましてね、それはもううれしかったです。お互いのことを話したりしました。人間というのは深いものだなあ、勝手にこちらで決めつけることはできないなあと思えました。自分の心は相変わらず狭い。冷たい心がしょっちゅう湧いてくる。そういう自分の心をよく知らさ

れていくことの大切さを、学院の共同生活の中で学んだんですね。

私がこのようにお坊さんになっていったのは、竹中先生に、「得度したらいいですよ」と言われたのがきっかけで、得度したのです。なって初めて当事者として生きる姿勢を教えていただきました。そうして、こうやって親鸞聖人の教えの言葉をゆつくり味わっていますが、思えば、T大学でお念仏の方に出会わなかったら、学校の先生を辞めてまでも、親鸞聖人の教えを牛の歩みのように丁寧に聞きたいということにはなかつたでしょう。

人間にはいのちの深い願いに目覚めていくということがあるんだと。きつと皆さんもどこかで気づかれることだと思えます。どこでその芽を吹かれるか分かりませんが、きつといのちの願いに目覚められることと思えます。大谷専修学院に来て知つた安田理深先生は、私たちがこうやって仏教を聞きたいと思うことは、春になると、木が芽吹くようなものだと言っておられます。春になって木が芽吹く、いのちの自然ですね。そういういのちの自然が、仏さまの教えに出会っていききたいとの願いになり、私の場合はたまたまですけど、先生に出会って、先生に惚れた。皆さんもきつ

目覚めるということ

とそういう人に出会って、本当に深く「ああ、自分もああいう人になりたいなあ」って、そういう思いが起こってきたら、必ずそこで、歩みということが始まるんだと思っ
ています。

ぜひ、こういう教えに縁のある学校に学ばれていることを大事にして、いつかお互いの心が、春に木々の芽が吹くように、いのちの願いが芽吹きますように。
ありがとうございました。

——二〇一〇年一〇月二九日——